城中大火図（神戸市立南蛮美術館提供）

慶応４年（明治元年）正月、鳥羽伏見の戦いに敗れた徳川兵は、５日から６日にかけて大阪城に退却、６日夜、徳川慶喜城中より脱出のあと城内大混乱、７日から８日にかけて、城兵は諸方へ落ち延びていった。城内に残ったのは、城明け渡しの命をうけた目付以下５、６名の幕臣のみであった。

長州・薩摩兵が大阪城に進軍してきたのは９日早朝のこと。午前８時ごろには、無血開城の話がまとま
はすでに京橋口定番屋敷が燃え上がっ
台所付近から出火して、消火にあたる
大火につつまれていった。そのうえ午
爆発、ものすごい地響きとともに黒煙
民の肝をひやした。こうして10日の夜

ったようであるが、その時にていた。そしてまもなく本丸者もないまま、みるみる全城前10時ごろ、城内の火薬庫がが天まで巻き上がり、大阪市まで燃え続けた火災と爆発のため、城内の建物はほとんど焼失し、焼け残ったのは本丸ではわずかに金蔵と金明水井戸屋形のみ、二の丸でも大手門・京橋門一帯とそのほか周囲の八矢倉くらいのものであった。

大錦三枚続きのこの錦絵は、城中大火後まもなくつくられ、市販されたものであるが、この大火に関する唯一の絵画資料といえよう。

（大阪城天守閣主任・渡辺武）